同窓会報
第129号
2018年10月15日発行
千葉大学教育学部
同　窓　会
〒263-8522
千葉市稲毛区弥生町1-33

皆様のご支援を

同窓会会長　町田義昭（S41・3卒）

本年度の教育学部同窓会総会で皆様からご推挙いただき、会長という大任をお受けすることになりました。浅学非才の身でこの大役が務まるか、不安の方が先に立つ毎日です。皆様のバックアップを力にして、少しでも期待に応えられるよう努力して参ります。

千葉大学教育学部は一八七二年（明治五年）、下総国流山村、印旛官員共立学舎での設立を起点とし、二〇二二年に創立百五十年を迎えます。千葉大学の中で創立年が最も早く、創立以降、戦前の師範学校・戦後の教育学部時代等々幾多の変遷がありました。日本の子供たちの教育に情熱を持って取り組む方々の熱意と努力の積み重ねに支えられて発展して参りました。この間の卒業生は、およそ四万三千名に上っております。

百五十年と一口に言いますが、その歴史の長さとその間に起こった様々な世情の変遷を思うと、その重みを感じないわけにはいきません。私たち同窓会は、この大きな節目に臨んで思いを新たにし、様々な世代の方々と来し方を偲び、これからの百五十年に向けて新たなスタートを切る必要があると考えています。

学部でもこの節目に向けた取り組みを考えており、同窓会といたしましては、学部長をはじめ学部の皆様・学生諸君と手を携えて、節目にふさわしい記憶に残る事業を実施して参りたいと考えておるところです。

現段階では、取り組み内容や取り組むための組織等々、具体化に向けて学部と積極的に意見交換をしている段階です。今後、会員の皆様とも協議を重ね、それを基に学部の皆様方と相談しながら進めて参ります。

ところで、私が入学した時期は、ちょうど現西千葉キャンパスに移転する節目でありました。受験は亥鼻、授業は稲毛と西千葉の両方で実施しており、徒歩で移動する毎日であったように記憶しています。東京大学生産技術研究所の跡地であった関係で、ロケット研究発祥地でもありました。貫井前会長はそれを記念し、西千葉駅構内に記念碑を建立するのに奔走したと聞いています。

今、構内を歩きますと建物も整備され木々も驚くような太さになりました。歴史を重ねた佇まいに趣さえ感じます。

しかし、急激な少子化とそれに伴って教員の必要数も激減することが予想されます。教育学部にとって平穏な未来ばかりではありません。我々同窓生も学部の将来を見据えて何が出来るか真剣に考えながら進んで参らねばならないと思います。一層のご理解とご協力をお願いし、就任の挨拶と致します。

学内の紅葉

紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
私の趣味・アラカルト	8面
読者の声	8面
戦争を語り継ぐ	9面
支部だより	9面
定期総会と表彰者の紹介	10面
受賞者からのメッセージ	11面
本年度経常予算と役員一覧	11面
教員養成へのお手伝い	12面
物故会員	12面

副会長就任に当たって

古山文夫（S48・3卒　長生地方）

このたび、第六十六回の定期総会において歴史と伝統のある千葉大学教育学部同窓会の副会長に就任しました古山文夫です。重い責任に不安と心配の種は尽きませんが可能な限り精一杯務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

現在、編集委員として同窓会報の発行に当たらせていただいています。同窓会報は年に二回の発行ですが、編集委員六人、皆、頭の回転が速く、アイデアマンの集まりで編集委員会を楽しみにしています。今後、会報発行はもとより、千葉大学教育学部の創立百五十年に向けて記念誌発刊に力を注いでいく所存です。皆さんのご支援とご協力をお願いし、就任の挨拶と致します。

特別寄稿

名画「道」を前にして

すみだ北斎美術館館長、信州大学名誉教授
前　長野県信濃美術館・東山魁夷館長
橋本光明
（S44・3卒　東京都）

画紙の中央に一本の道が描かれた作品がある。画面手前から上に向かって細くなっていく道。最後は右に折れ、青緑色の草原へと消えていく。その上には白藍の空が僅かに横に広がっている。

この絵を「単純な絵」と見れば、誰にでも描けるであろう。「無駄のない絵」と見取ると、気軽に描くことすら躊躇する。特に絵を描くことに繋げなくてよい。単純だから面白い、単純さ故に描いた人の世界観を感じるといった心の動きや考えなどを大切にしたい。

作品を見て感じ、考える場を提供するのが美術館である。多様な芸術文化に親しむ場として美術館にも個性がある。幸いにも私は、二つの特色ある美術館の管理・運営に携わることになった。県にゆかりのある作家の作品を所蔵する美術館と、一人の美術家を顕彰する目的で設立された美術館である。

前者は、善光寺に隣接する長野県信濃美術館である。収蔵庫には、油絵や彫刻、工芸品等が保存されてある。後者は、書き出しの『道』を描いた国民的風景画家、東山魁夷作品の多くを所蔵する館である。

この夏の厳しさは、命に危険を及ぼす暑さであったが、作品にも命がある。そのため専用の保存や管理方法によって作品の命を守る場所が、美術館である。

油絵よりも劣化しやすい日本画を展示する東山魁夷館の照明や湿度は、隣の信濃美術館よりも暗く、低い。紫外線が、肌にダメージを起こすように、作品退色の原因になる。蛍光灯は特に紫外線が強いので、展示室では退色防止蛍光灯を用いてきた。現在は、紫外線が発生しない小型のＬＥＤが普及して、空間演出も可能になった。

人や動物などを描かない魁夷が昭和四十七年の一年間だけ白い馬を風景の中に描いた。中でも『緑響く』や『白馬の森』を見るために半世紀近く経った今も、全国から多くの方が来館している。この代表作は、貸出さない方針であるが、京都と東京で見ることができる。

生誕百十周年の今年は、東山魁夷館が改修中（再開は、来年の秋）のため異例の搬出で記念展をお祝いする。偶然にも唐招提寺御影堂も改修工事のため、東山芸術の集大成として有名な『山雲』『濤声』等の六十八枚の襖絵も展示される。

千葉県と東山魁夷との関係は深いので、この機会に東京国立近代美術館へお越しいただきたい。以後三十年間は、確実に実現しない大展覧会である。鹿野山での体験から生まれた『残照』も鑑賞できる。魁夷芸術の幕開けを告げる作品であり、自然との対話の中で人間の根源的な存在を問いかけてくる。

終戦後、住む家もなく、両親兄弟全てを失い、落選が続き、どん底に落ちた時に魁夷は言う。「これからは上へあがる以外に道はない」と。誰もが歩める道は、新たな足音を待っている。「この道より他にわれを生かす道なし」深奥をあらわす言葉と共に『道』が完成した。

千葉大、筑波大の各附属小を経て、魁夷館の完成一年前に信州大学に移った。教員四十二年間の美術教育の道は、単純で浅識である。この間の美術館協力が縁で、消え去る道が右に曲がった。七年間の魁夷館勤務の後、左にも折れた。

四月から、すみだ北斎美術館で五十年目の勤務が始まった。今度は天才葛飾北斎の道が迫ってきた。

残照（昭和22年）
鹿野山からの光景と心が重なり合う

教員養成へのお手伝い
（進路相談事業）

本年の教員採用選考も大半の学生が八月末をもって二次選考を終え、結果を待つばかりとなった。

同窓会では学部の「学生・就職委員会」からの依頼を受け、また事務の方々の支援を得て、主に次の三つの進路相談事業を行っている（十月～翌年九月）。

○サポートルームでの相談：進路に関する悩み、志願書の書き方、集団面接・個人面接・模擬授業・小論文対策等

○ガイダンスでの支援：「教員採用選考に向けて」から始まるロールプレーイング中心の六回のガイダンス

○教員採用セミナー：採用選考に向けて考えを整理する連続八回の講座

現在学生は複数免許取得を要請されており、学業に忙しい。

また、教育実習の他、ちば教職たまごプロジェクトやボランティア等で子供たちと触れ合う機会を増やしている者が多い。

最近、小論文の書き方や進路相談にサポートルームに訪れる学生が増えてきた。

次に、進路相談事業の必要性を認識した学部から、支援要請を受た初期の動きを述べる（山中顧問のメモを参考に）。

○平成十四年・学生・就職委員長より就職対策に、同窓会の協力や援助をお願いする要請があった。

模擬授業

○同十五年・学部長より山中氏に相談員に対する辞令が交付された。・山中相談員の活動が開始されたが、一か月後、地元教育長に就任により退任、代わって三名の相談員が就任した。・総会で岡田会長が学生の進路相談事業の開設へ学部と共同企画のもと、同窓会員が相談を担当すると提案、採択、同会として十五万円の予算計上を行った。

○同二十二年・相談対象を三年生に拡大した。学部より一部経費負担の申し出があり、週五日実施する体制が確立した。

○同二十三年・相談員は特命教授として任命された。

（文責　佐藤洋一郎）

編★集★後★記

「暑すぎる夏」が定着。酷暑の中執筆された皆様、誠にありがとうございました。

現場からは、新学習指導要領の実施に伴い道徳・外国語への対応に追われる一方、働き方改革で勤務軽減に努力する姿が垣間見えました。また、先輩からは、時代がどう変わろうとも、問題を抱える子に向き合う先生であって欲しいとの願いを伝えていただきました。

退職された皆様からは、健康維持の努力をされながら、地域・社会の役職を担われている、ボランティア精神溢れる姿が伝わって来ました。人は「つながり」の中でこそ生きがいが持てることを改めて感じました。そしてそれは、平和な日々が続いてこそのものだと。

ご感想の投稿は、反響を感じられ励みになっています。文面に影響を受けた方の見方・考え方が広がる様子を想像すると、編集委員会も和やかな雰囲気になります。

皆様のご意見を心よりお待ちしております。

百五十周年まであと四年。この節目がきっかけとなって同窓生の交流が盛んになり、後輩へと裾野が広がりますように。（文責　林　廣明）